　一方の係留地。
　ネックとノランはリアムに手を上げて応えた。
「教授〜！」
　ことが治まったのを見届けたジョシュアが荷車を引きながら駆け寄ってきた。
「どうやら大事な開発品は無事なようだな」
　ノランはアルノルドに目をやった。三体の邪獣を一瞬で亡き者にした炎に包まれながら、火傷ひとつない。ロングコートにも焦げている様子が一切ない。
 ノランは疑念を募らせる。
「あいつ何をしやがったんだ」
　耳打ちされたネックは肩をすくめながら、
「なんだろうな」
 しらばっくれた。
「それより、お前は大丈夫かよ」
「ん〜……」
　ノランは右手のひらをぷらぷら振って、
「全力でいったからな。ちょっと手が痺れてっけど、すぐ治んだろ」
　係留地に、徐々に人々が集まり出した。
 避難していた街人や漁師である。
 彼らはおっかなびっくり邪獣の焼死体を避けながら、疲労困憊のふたりに「すげえなあ！」と声をかけた。
「なんだい、どばばばばって、すげえ炎が出てさ！　あれが魔法っつーのか？」
「海のことしか知らねえけど、俺には分かる。こりゃとんでもねえ腕利きだよ！」
「あんたらは英雄だ！」
　ふたりを中心に出来上がった人の輪から、口々に賛辞が飛ぶ。
　ネイクス大陸では忌み嫌われていた異血の自分が「英雄」か。
 ……ノランはその皮肉さに苦い顔をする。
「こんなに人集まってきて大丈夫か？」
 ネックも聴衆からの言葉に苦笑いをしつつ、周囲を見回す。
「いや、また邪獣が現れるかもしれない。安全なところに身を隠してもら――」
 ネックの言葉を遮るように、人の輪の中から一人が声を上げた。
「いや、その心配はない」
　余裕の笑みを湛（たた）えたアルノルドだった。

つづく